

# 第1章 1988年度京都大学構内遺跡調査の概要

西川幸治 大山喬平 清水芳裕 五十川伸矢

## 1 調査の経過

京都大学埋蔵文化財研究センターは、吉田キャンパスおよび附属施設の敷地内における建物新営やその他掘削工事の際には、当該部局の報告にもとづき、予定地の埋蔵文化財の調査を、既知の遺跡との関係や過去の調査結果より、発掘、試掘、立合にわけて実施している。1988年度には、以下の発掘調査3件、試掘調査1件、立合調査5件、資料整理2件を実施した。

発掘調査	芝蘭会国際交流会館建設予定地 (AR19区)	(第3章 図版1-190)
	附属病院中央診療棟・臨床研究棟新営予定地 (病院構内AH19区)	(図版1-191)
	ウイルス研究所実験研究棟新営予定地 (病院構内AE12区)	(図版1-192)
試掘調査	理学部動植物学教室新営 (北部構内BD28区)	(第1章 図版1-183)
立合調査	吉田地区キャンパス情報ネットワーク施設整備工事 (全構内)	(図版1-193)
	宇治地区キャンパス情報ネットワーク施設整備工事 (京都府宇治市)	(図版1-194)
	農学部農林生物学科日長処理施設空調機用電源取設 (北部構内BG36区)	(図版1-195)
	医学部附属病院地区基幹整備その他工事 (病院構内AG11区)	(図版1-196)
	農学部附属京都農場低圧電線路改修工事 (北部構内BI32区)	(図版1-197)
資料整理	工学部電気系学科校舎新営 (本部構内AW27区)	(第2章 図版1-181)
	附属病院中央診療棟・臨床研究棟新営予定地 (病院構内AH19区) (整理中)	図版1-191)

## 2 調査の成果

前節で記載した調査のうち、1988年度に整理を終えた3件について、その成果を略述する。なお、AW27区、AR19区の発掘調査については第2章・第3章、BD28区の試掘調査については本章第3節で詳述する。

縄文・弥生時代の遺跡 本部構内AW27区で、縄文中期・後期・晩期の土器、弥生前期・中期の土器と石器が出土した(第2章)。本部構内において、はじめて縄文中期の土器が検出されたことは注目すべきである。また、出土した縄文・弥生土器は、層位的には本来の包含層よりも上の土層中に含まれていたものであり、黄色砂より下の堆積層には遺物が包含されていないため、周辺地区からの流れ込みによって二次堆積したものと考えられる。また、土器は全体的に遺存状況が良いため、AW27区の北東方にかけての一带に縄文・弥生時代の集落の存在を推定することができる。また、北部構内BD28区の試掘調

査では、調査地点付近で、縄文～弥生時代には、急激に傾斜する地形の存在したことが明らかになり、北白川扇状地の中央部における詳細な地形環境を復原するための資料を得た(第1章第3節)。

中世の遺跡 本部構内AW27区で、土坑、溝、集石など、ほぼ13世紀中葉～後葉の遺構群を検出した(第2章)。溝は中世の地割りを復原する材料を提供した。また、土坑のうち、SK3からは、おびただしい量の土師器とともに、瓦器、白磁、青磁、青白磁、黄釉陶器、瓦、金属製品、炭化材、貝殻などが出土し、1980年に調査をおこなったAX28区検出のSK51〔五十川83 pp. 10, 12〕とともに、13世紀の中葉ごろに大規模な廃棄場所が形成されていたことが判明した。出土遺物には、「福海壽山」の吉祥句を書いた黄釉陶器盤、金銅製で繊細な魚子の装飾をもつ飾金具、鋤または鍬の先金など、類例が少なく注目すべきものがふくまれている。これらの遺構は、本部構内一帯の土地利用の変遷を知るための重要な資料である。

また、芝蘭会国際交流会館建設予定地AR19区では、根石をもつ柱穴、溝、土坑、瓦溜、石組みなどの中世の遺構を検出した(第3章)。遺構は、ほぼ13世紀から14世紀にわたるもので、小面積の調査ながら瓦の出土がめだち、付近に寺院や邸宅などの瓦葺の建物の存在を想定できる。医学部構内周辺には、正治元(1199)年に藤原北家勧修寺流の吉田経房が建立した菩提寺じゅうりんげいんの浄蓮華院や邸宅が比定されており〔浜崎83b〕、13世紀に属する瓦が出土したこの調査区は、その一画にあたる可能性が高いものと考えられる。

近世の遺跡 本部構内AW27区で、近世白川道の道路遺構と、これにともなう野壺、溝などの遺構を検出した(第2章)。路面は傾斜地の高い部分を切り崩して造成しており、礫や砂で舗装をおこなっている。道路の路面はI～Vの5面があり、これにともなう轍や側溝がよく残り、沿道の野壺や畑の遺構も確認した。また、路面や側溝などの出土遺物から、道路の存続時期を、ほぼ18世紀後半から19世紀半ばごろにいたるものと推定することができた。近世白川道は、微高地の尾根をまっすぐ登るものではなく、その南腹の傾斜面を切り崩して造成し、ゆるやかに登ってゆく形態をとっており、当時の交通形態に対応した構造をもつものであろう。これらは、道路の構造やその周囲の景観の歴史の変遷を検討するための重要な資料と考えられる。

また、AR19区の南前面には、現在の白川道が南西から北東にはしり、発掘調査によって、近世白川道の北端部を検出した(第3章)。路面は2面あり、下の路面には轍が存在する。沿道には野壺が散在し、周辺の景観変遷を復原する資料を得ることができた。

### 3 北部構内 BD28区 の試掘調査

本調査は理学部動植物学教室新営の計画にともない、予定敷地内の試掘調査をおこなったものである（183地点）。この一帯は北白川追分町遺跡の西端にあたり、近接する54地点では、弥生中期の方形周溝墓、鎌倉初期の火葬塚が、また109地点では古代の建物跡、近世の瓦溜などが検出されている（図1）〔岡田・吉野79, 浜崎83a〕。2m×2mの試掘坑を3ヶ所設けて層序と出土遺物の確認をおこなった。各試掘坑とも遺物包含層は良好に残っており、弥生時代から近世に至る各時代の堆積状況を知り得た（図2）。

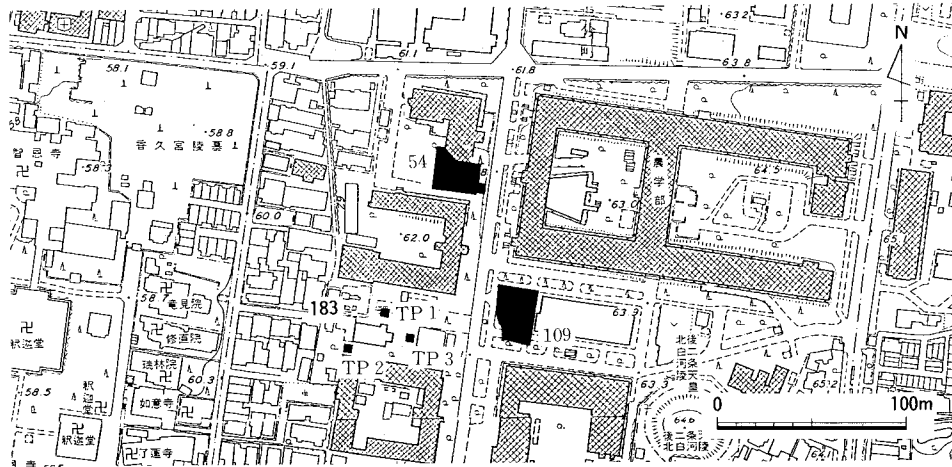


図1 試掘調査の位置と周辺の調査区 縮尺 1/4000

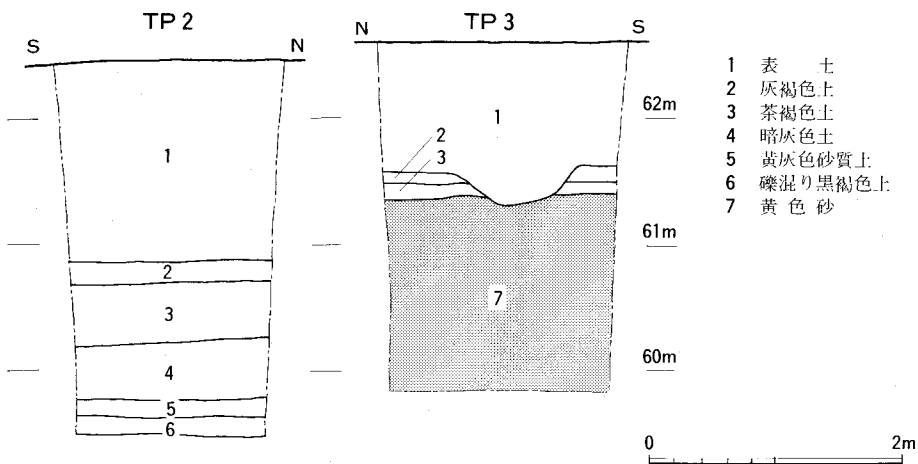


図2 TP2西壁・TP3東壁の層位 縮尺 1/60

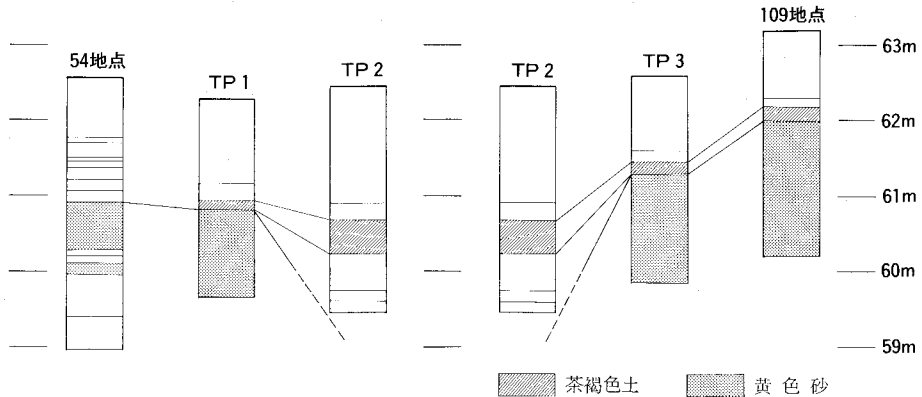


図3 TP1・TP2・TP3・54地点・109地点の層位模式図

まずTP1とTP3では、地表下約0.5mで弥生前期末～中期初頭の黄色砂層（第7層）の堆積が認められた。両試掘坑とともに、この直上に堆積する茶褐色土（第3層）で中世の土師器が、またその上層の灰褐色土（第2層）では、近世の陶磁器類が出土する。一方TP2では、TP1・TP3と同様に中世・近世の遺物包含層が認められるほか、中世の遺物包含層である茶褐色土の直下に堆積した暗灰色土（第4層）からは、10～11世紀の須恵器鉢、土師器羽釜が出土した。ここでは地表下約3mまで掘り下げたが、黄色砂を確認することができず中断した。おそらく、さらに下層に堆積しているものと考えられる。今回の試掘では、遺構の痕跡は検出できなかったものの、弥生時代から近世に至る各時代の遺物包含層が存在することが明らかになった。それとともに、この一帯の先史時代の地形が周囲と比較してきわだって低いことを復原することができた。

図3は黄色砂層上面および茶褐色土層を中心に近接する2地点と比較した模式図で、左は54地点、TP1、TP2を結ぶほぼ南北の堆積層の変化を、右は109地点、TP3、TP2を結ぶほぼ東西のそれを表わしたものである。まず南北方向では54地点からTP1へ向かってゆるやかに傾斜し、そしてTP2との約20mの間で急激に下がる。一方109地点からTP2へ至る東西方向でも、全く同様の傾向が認められる。北部構内では全体に西へ向かって傾斜する旧地形が従来の調査から知られていたが、この地点付近でさらに急激に傾斜していたことが明らかになった。さらに南北方向の傾斜は、農学部本館、理学部本館周辺での調査結果を総合すると、東から西へ向かう谷状地形の北側の肩部にあたるものと考えられる。以上のように、本調査では良好な遺物包含層の確認とともに、先史時代の地形復原に関して貴重な資料を得ることができた。